



## 名画の扉

この「雨後」という作品をみると、具体的なイメージは描かれてはいませんが、雨あがりの湿潤な空気が伝わってきます。オノサトのなかにある純粹で纖細なこのリシズム（叙情性）と「抽象」への志向が、作品として昇華するには、まだ時間が必要だったのでしょうか。

しかし、1942年に応召、満州で終戦を迎える、その後3年間のシベリア抑留。桐生に帰ることができるのは48年のことでした。そこから、画家は再び摸索をつづけることになります。（田中）

## 文化・藝術

### オノサト・トシノブ（1912～86年）

青年期の作品を振り返ってみると、新しい、そして自分らしい表現を探して、さまざま「実験」を続けていたことがわかります。

オノサトは、「セザンヌ」「モンドリアン」といった画家の名前を挙げています。抽象表現へと変革していく20世紀アートの動向を理解していたとしても、彼にはいまだ自分の表現ができない「もどかしさ」があつたと思われます。

この「雨後」という作品をみると、具体的なイメージは描かれてはいませんが、雨あがりの湿潤な空気が伝わってきます。オノサトのなかにある純粹で纖細なこのリシズム（叙情性）と「抽象」への志向が、作品として昇華するには、まだ時間が必要だったのでしょうか。

### 「雨後」

1939年、油彩・合板  
53・0セン×45・5セン（大川美術館蔵）